

前期日程

令和 8 年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

—— 解答上の注意事項 ——

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子 1 冊と解答紙 2 枚がある。
- 3 問題は 3 問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

— 次の文章は、批評家の宇野常寛による『庭の話』の一節である。宇野はこの文章で、フランスの庭師ジル・クレマンの仕事について述べている。よく読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、原文を一部改めたところがある。)

ジル・クレマンは一九四三年生まれの庭師で、パリのアンドレ・シトロエン公園の庭やケ・ブランリー美術館の庭などがその代表作だ。「動いている庭」をそのコンセプトにかかげるクレマンの仕事は、少なくともヨーロッパの伝統的な作庭とはかけ離れている。

クレマンはヨーロッパの伝統的な「生命をあたかもオブジェのように一つのかたちのなかに押しとどめようとするあらゆる試み」に違和感を表明する。しかしその一方で、アジアの伝統的な作庭——たとえば日本的な、見立てることを用いた作庭——の方法に敬意を表しつつも、これらの「庭」と自分の造る「庭」とでは「庭」をかたちづくる「境界」の概念そのものが異なっていることを挙げ、自分の作庭との違いを強調する。<sup>\*1</sup>

「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」——それがクレマンの作庭における基本姿勢だ。その「逆らわない」対象とはなにか。それは自然の営みだ。クレマンは述べる。庭とは古来「最良のもの」を守る囲いであった、<sup>\*2</sup>と。「庭」が事物とのコミュニケーション(作業)の場から自己と世界、私と公を接続する場所として認識され、それが家庭内の宗教的な儀礼の場を経て、やがて観賞されるものに変化していったことはすでに確認したとおりだ。<sup>\*3</sup>この東西を貫く「庭」の歴史とクレマンの指摘をあわせて考えたとき、そこに浮上するのは人類がその「最良のもの」として、自己と世界とを接続する回路としてもっともふさわしいもの——大切なもの、美しいもの、理想とされるもの——が選ばれてきたという側面だ。

それはたとえば砂漠の国では「水」であった、とクレマンは述べる。イスラム式庭園で噴水と水路がその中心に置かれたのはそのためだ、と。そして「水」が砂漠の世界においてもっとも希少な、命をつなぐものでありそれを手にすることが権力そのものであったように、十八世紀のフランス庭園では、啓蒙思想を体现するためにあらゆる要素が「対称的に」配置され、人間の理性とそれが作り上げる秩序の自然に対する優位が表現されたのだとクレマンは述べる。それは単にその庭が、啓蒙思想が社会を動かした時代につくられたからだけではなく、その時代には啓蒙主義の理想こそが「最良のもの」として認識されていたからこそ、それは「庭」の中心的なコンセプトに選ばれたのだ。

そして、クレマンはいう。今日において、私たちが「囲う」べき「最良のもの」は「生命」そのものである、と。実際に、クレマンのつくる「動いている庭」は、一見、自然そのもののように見える。そこは(とくに夏場には)草がぼうぼうと茂り、よく見ると生えているものも実に多様……といえは聞こえがよいが、その外観はむしろ「混沌」という言葉がふさわしい。その庭は噴水と花壇を中心に左右に空間が広がり、対称的に同じ植物が配置される、ヨーロッパの伝統的な「庭」とは似ても似つかない。シンメトリーな歩道などあるはずもなく、こうした茂みや、まったく人間に遠慮することなく根を張った木を避けるように、人間の歩く道がその脇に曲がりくねって配置される。これが「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」クレマ

ンの作庭だ。

クレマンの作庭の原型となったのは、「ラ・ヴァレ谷の庭」と名づけられた彼の自宅の庭だ。一九七七年にクレマンは谷底の小川の流れる土地を購入する。そこは、藪やぶの茂る荒地地と呼んでさしつかえない場所だった。クレマンは十年ほどかけてみずからの手で石を積み、そして庭を作り上げた。そこでクレマンは、「雑草」の代名詞である（フランスにとつての）外来種バイカルハナウドの、侵略的な繁茂を排除するのではなく、むしろ作庭の中心に置いた。

きっかけはクレマンがある日、庭のなかの道の真んかにバイカルハナウドが芽吹いているのを発見したことだ。繁殖力の強いこの植物は、放置すると瞬間に他の植物を淘汰たうたしてその場所を覆ってしまう。他の庭師たちがそうしているように、クレマンもこれまではこの雑草を見つけしだい排除していた。しかし、このときクレマンはこの若い芽を抜かなかった。むしろ、この芽を避けるように芝刈り機をかけて、道のほうを作り変えた。そしてこの一本のバイカルハナウドが、これ以上繁茂しないように実を結ぶ前に剪定せんていし、一本の木が枯れないように、しかし繁殖しないように維持しつづけることを選んだ。ここでクレマンは、自然の生態系を「そのまま」活かしているのではない。バイカルハナウドの侵略的な繁殖力を、庭の生態系を豊かに変化させる乱数Bとして利用しつづつも、その強すぎる力が他の植物を圧倒しないように介入しつづけることを選択したのだ。このとき「動いている庭」の基礎が生まれた。

同じようにクレマンは、倒れたリンゴの木を活かして、その幹から出た新しい芽のうち一本だけを選び、育て、実を結ぶまでに伸ばした。庭師の

仇敵きゆうてきとして長く憎まれてきたモグラのあける穴は、柔らかい土にしか芽吹かない植物のコロニー\*4として利用した。

このクレマンの自邸の庭（「動いている庭」）は、彼の作庭の最大のコンセプトを生み出し、そのコンセプトに基づいていくつもの代表作が生まれていった。パリのアンドレ・シトロエン公園では、一年目にクレマンら庭師たちはまずさまざまな植物の種を播まき、その芽の出かた「から」庭のかたちを構想していった\*5。あるいはリヨン高等師範学校の庭では、その庭のなかの道のほとんどがその年に生える草花の移動にあわせて、事後的に庭師たちによって決められる（つまり、毎年変化する）。これらの庭には絵葉書のような自然の美しさはない。しかし、訪れた人びとはそこで、その動的な自然物の生態系の運動に触れることになるのだ。

このとき留意したいのは、このクレマンの「動いている庭」の思想が素朴な自然に対する崇拜とは、かなり距離があるものであることだ。クレマンはその場所の生物、とくに植物の移動を可能ながぎり活かす。しかしそれはけっして、自然そのものではない。こうした自然物の、人間の意識からは生まれることのないアルゴリズム\*6に従った移動と変化（それは人間の目にはほとんど偶然に見える）を活かすことで、人間がそれらの多様な展開を効果的に受けとれる場所を、庭師の仕事として設計しているのだ。

「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」——クレマンのこのコンセプトは、けっしてありのままの自然を想定し、それを理想とするものではない。「できるだけ」合わせるとは、合わせられないものがあることを意味し、「なるべく」逆らわないとは、逆らわなければならない領域があることを意味する。そして何より、人間の手が加えられないその場所は「庭」では

ない。人間が関与できないかぎり、そこは自己と世界、私と公を結ぶ場所にはなりえないのだ。

クレマンは「庭」を意味する英語「garden」、フランス語「jardin」の語源がともに「囲われたもの」を意味することに注目する。かつて、人びとは家屋の前に設けた今日の基準で考えると庭とも農場ともつかない「囲われたもの」のなかで作物を育てていた。そう、この「囲われたもの」で人びとが作物を育てていた時代には庭園と農場が未分化だったのだ。ここで重要なのは農業とは保存の利く、そしてその土地に合った穀物など基本的に本来その土地には根づいていなかった植物を播いて、育てることによって拡大した産業だったことだ。「庭」の原型である「囲われたもの」は、いわゆる外来種を育成するための場所であったのだ。そして今日においてはたとえば日本に暮らす人があたりまえのように庭の花壇にチューリップを植え、サボテンを愛でている。もしクレマンが人間の手を排除することで、ありのままの自然を保持しようと考えたならば、フランスの山間にコーカサス地方から人間の手によってもたらされたバイカルハナウドなど<sup>\*7</sup>けっして存在してはならないことになる。しかしクレマンは、この繁殖力の強い植物の侵略的な移動を、「庭」に変化をもたらすものとして取り入れることを選択した。バイカルハナウドを抜かず、その侵略的な繁殖を逆手に取ることには、クレマンにとっては自然のもつ多様な変化を活かす方法であり、さらにそこが<sup>C</sup>ありのままの自然ではなく、「庭」<sup>D</sup>でありつづける条件であり、そして「庭」の本来あるべき姿への接近なのだ。

クレマンはそもそも「外来種」という概念に懐疑的な立場を取る。人間の移動にともなう、動植物の拡散と繁殖——それが意図したものであったと

しても、そうではないとしても——は、地球の自然がみずから変化する長大な時間をかけた運動を加速するが、けっしてそのセツリ<sup>E</sup>に逆らったものではない、とクレマンは考えるのだ。

モーリシャス島<sup>\*8</sup>でドードー鳥が人間によるランカク<sup>ウ</sup>などを原因に絶滅したあと、ドードー鳥と共進化<sup>\*9</sup>し、共生してきたと思われるカリヴァリア（くるみの一種）も衰退した。カリヴァリアはその実をドードー鳥に食べられ、糞<sup>ふん</sup>とともにその種が拡散されることで繁殖のサイクルを構築させていたためにドードー鳥の絶滅によって生命のサイクルの片方の車輪を外されてしまったのだ。そしてこのカリヴァリアの危機を救ったのは、皮肉にも人間がもちこんだ外来種——七面鳥——がその実を食べはじめたことだった。このように眺めると、人間の営みは必ずしも自然と対立するものではない。人間の手によってひとつの共進化の成果が破壊されたことも事実だが、人間の手によって新しい共生がそこで生まれ、共進化の可能性が芽生えたこともまた、事実だ。人間の営みは、自然の運動を加速することがあっても、けっしてそれを根底から破壊し、止め、そして逆行させること<sup>E</sup>はない。拡散し、混じりあい、そして進化する。「生はノスタルジーを寄せつけない。そこには到来すべき過去などない<sup>\*10</sup>」——クレマンは自然の本質をノスタルジー的なものではなく、エントロピー的なものと述べる。そして人間の営みはエントロピーを増大させることがあっても逆はない。それがクレマンの立場だ。

そしてこの議論の延長にクレマンは疑問を投げかける。そもそも手つかずの、ありのままの自然とは存在するのだろうか、と。すでにこの地球に人間の手が入っていない場所は存在しない、と。そこがアマゾンの密林の

奥地であれ、極点近くの氷山のフモト<sup>エ</sup>であれ、いや、そういった場所だからこそ、たとえば人類の排出した二酸化炭素の増加の影響を強く受ける。原理的に考えたとき人間の影響を受けない自然など、人類の発生以来そもそもこの地球に一度も出現したことはないことになる。

このように考えたとき、クレマンの「動いている庭」は地球そのもののミニチュアと見なすことができる。いや、クレマンの言葉を借りれば、むしろこの地球こそが「庭」なのだ。「動いている庭」として、この地球全体に「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」かたちで介入することで、自然の力を最大限に引き出すこともよい人間と自然とのコミュニケーションなのだ。この世界とは、いわば「地球という庭」であり、より正確には地球とは巨大な「動いている庭」なのだ。したがって人類はすべて広義の「庭師」である、とクレマンは述べる。自然のもつ、複雑化に向かう力を人間のために用いること。クレマン<sup>F</sup>という「庭師」の思想が重要なのは、この発想を私たちに与えてくれるからだ。

#### 注

- 1 ジル・クレマン『庭師と旅人 「動いている庭」から「第三風景」へ』（エマニュエル・マレス編、秋山研吉訳、あいら出版、二〇二一年）二二ページ（原文の注による）。
- 2 同右、二一ページ（原文の注による）。
- 3 筆者は本文の前の章において、「庭」という言葉の歴史的な変遷に言及している。
- 4 群落。

5 注1に同じ、二三ページ（原文の注による）。

6 ここでは、一定の手順やルールの意。

7 黒海とカスピ海の間にある山脈沿いの地帯。バイカルハナウドの原産地の一つとされる。

8 マダガスカル<sup>9</sup>の東にある島。ドードーは十七世紀後半に絶滅したとされる。

9 ある生物が進化することで、他の生物もそれに影響されて進化する事。

10 ジル・クレマン『動いている庭』（山内朋樹訳、みすず書房、二〇一五年）一六ページ（原文の注による）。

問一 二重傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「庭とは古来「最良のもの」を守る囲いであった」について、次の(1)と(2)に答えなさい。

- (1) 「最良のもの」について説明した箇所として最も適切な部分を、本文中から三十字以内で抜き出しなさい。
- (2) (1)の具体例として挙げられているものを、本文中から重複せずにすべて抜き出しなさい。

問三 傍線部B「乱数として利用」するとはどういうことか、「人間」「自然物」「庭」という語を用いて説明しなさい。

問四 傍線部C「庭」でありつづける条件」とは何を指すか、簡潔に答えなさい。

問五 傍線部D「庭」の本来あるべき姿への接近」とあるが、庭は「本来」どのようなところだったのか、本文中の語句を用いて説明しなさい。

問六 傍線部E「ノスタルジ的なものではなく、エントロピー的なものだ」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

問七 傍線部F「クレマンという……くれるからだ」とあるが、本文で述べられている庭づくりの発想は、庭づくり以外の場において、どのように活かさ

れていると考えられるか。あなたの考えを次の条件①～③に従って書きなさい。

条件① 自分の知識・体験や実社会の中から適切な題材を一つ取り上げること。

条件② 本文で述べられている庭づくりの発想との関連を明示すること。

条件③ 解答欄に収まる範囲で読みやすく記述すること。

二 次の文章は『春雨物語』に収められた「捨石丸」の一節である。「」の部分で踏まえて本文を読み後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。)

大柄で怪力の捨石丸(本文では「捨石」または「丸」)は陸奥の長者に可愛がられていたが、ある酒席の帰りに誤解から長者とその息子の小伝次(若君)ともみ合いになり、長者は翌朝急病で死んでしまう。捨石丸は主人(長者)を殺したと思いきみ逃亡し、周囲は主人殺しと噂をする。小伝次は陸奥の国守から親の仇討ちをしなければ全財産を没収すると言われ、仇討ちのために武術の修行を行う。数年たち、捨石丸は西国の国守に面倒を見てもらっていた。

① 国は豊くにの何がし殿にて、心広き御人なり。かく養ひたまふ中に、酒の毒にや、疔をやみて、つひに腰抜けと成りたり。申し上ぐるは、「主をこそ殺さね、その名たかきには、罪大なり。若君たわやかにて、我はえ討つまじく、仏の弟子にや、姉の尼君と同じ衣にやつさせたまはんものぞ。いきて討たれんと思へど、腰折れたれば、四百余里いかであゆまん。聞きつるに、この御くにの何がしの山は、岩ほ赤はだかにて、今の道を廻りて、八里ばかりと聞く。ある人の大願にて、このあか石一里ばかりを、道にきりとほさば、往來の旅客、夏冬のしのぎを得て、命損すべからず。今やうやう穴をつつきて、一丁ばかりといふ。我が主の長者の御為に、これをぬきて、ひとのためにすべし。足立たねど力あり。よくよくつとむべし」とて、御いとまたまはり、鉄槌の二十人してもささげがたきをふりたてて、先づうつほどに、およそ一日に十歩はうちぬきたり。国の守触れながして、民に「力そへよ」とて、民はこの石の屑をはこぶ事、いく人かしてつとむ。

一とせに過ぎて、やがて打ちぬくべき時に、小伝次たづね来たりぬ。捨石申す。「主をこそさぬ事、御子の君ぞしらせたまへる。されど、かく事ひろごりては、申しわくとも無益なり。我が首うちて往にたまへ」といふ。「首とらんとて来しかど、この行路難を開きて、長き代にたよりする、御父の手むけとぞ。いで、我も力そへん。家は亡ぶともいかにせん。始ある物、必ずよ終ある、時なるべし、姉は仏の弟子にておはせば、よく思しとりて、心しづかに行ひたまはん。我力をそへて後に、姉の所にいきて、す行すべし」とて、かひがひしく石はこび、民とともによく交はる。捨石、「あなたふと。しかおぼして、この事に力そへ給ふは、神よ、ほとけよ」とて、よろこぶよろこぶ。ある日いふ。「若きみ我を討たんとて、尋ね来たまへど、骨よわく力なければ、腰ぬけたる我をもえ討ちたまはじ」といふ。小伝次こたへなく、そこにある石の二十人ばかりしてかかくべきを、躍りたちて蹴れば、石は鞠のごとくころびたり。捨石おどろきて、「いつのまに、かかる力量は得たまひけん」といふかる。小伝次また腰の弓つがひて、ひやうと放つに、雁二つ射ぬかれ地に墮ちたり。「汝力にほこれども、かれは限りあり。我が業千変万化、汝が腰たちてむかふとも、童をせいするばかりたやすし」。丸ふし拝みて、

D  
「心奢りたるは愚かなり」とて、小伝次に、かへりてこと問ひ、学ぶ。かくて月日をへ、年をわたりて、およそ一里がほどの赤石を打ちぬき、道たひらかに、所々石窓をぬきて、内くらからず。もとの道は八里に過ぎて、水うまやだになく、夏は照りころされ、冬はこごゆるを、この岩穴にて、ゆききやすく成りにたり。馬に乗りて、鎗たてて行くともさはりなし。

注 \*国は豊くにの何がし殿にて……国守は豊前を領国とする何某殿で。

\*疔……悪性の腫物。

\*その名たかきには……このように評判が広まってしまったは。

\*岩ほ……大きな岩。

\*八里……一里は約四キロメートル。

\*今やうやう穴をつつきて、一丁ばかり……(一念発起して)今やと穴をうがつこと一丁(約百九メートル)ほど。

\*触れながして……お触れを出して。

\*事ひろごりては……事態が大げさになってしまつては。

\*行路難を開きて、長き代にたよりする……道の難路を切り開いて、後の世までの利福を圖っている。

\*家は亡ぶとも……家が取りつぶされても。

\*す行すべし……仏道に入ることしよう。「す行」は修行のこと。

\*水うまや……休息を取る所。

問一 二重傍線部①～③の助動詞の意味を答えなさい。

問二 波線部ア「これ」・イ「かれ」の指すものを文中の語で答えなさい。

問三 波線部 a・b を、主語を補って内容がわかるように現代語に訳しなさい。

問四 傍線部 A「我も力そへん」とあるが、(1)何をすることに力を貸すのか、(2)なぜ力を貸そうと思ったのかについて説明しなさい。

問五 傍線部 B「よろこぶよろこぶ」とあるが、なぜこのように喜んだのか、説明しなさい。

問六 傍線部 C「捨石おどろきて」とあるが、なぜ驚いたのか、説明しなさい。

問七 傍線部 D「心奢りたるは愚かなり」とあるが、ここに込められた捨石丸の気持ちを説明しなさい。

三 次の文章をよく読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。)

張儀ちやうぎ欲シ以テ秦・韓ト与レ魏之勢ヲ伐ク中。齊・荆ヲ上、而惠施けいし欲ス以テ齊・荆ヲ偃や兵ヲ。二人争ヒ之ヲ、群臣左右皆為ニ張子ノ言ヒテ、而以テ攻ム齊・荆ヲ為レ利アリト、而莫シ為ニ惠子ノ言フモノ。王果タシテ聽キテ張子ニ、而以テ惠子ノ言ヲ為ス不可ト。

攻ム齊・荆ヲ事已定マル。惠子入リテ見マミユ。王言ヒテ曰ク、「先生母ニ言フ矣。攻ム齊・荆ヲ之事

果タシテ利アリ矣。一國尽ク以テ為レ然リト。惠子因リテ說ク、「不可レ不レ察也。夫齊・荆之事也誠利アリテ、

一國尽ク以テ為レ利アリト、是何智者之衆おほキ也。攻ム齊・荆ヲ之事誠不シテ利アラ、一國尽ク以テ為レ

利アリト、何愚者之衆キ也。凡謀者はカル、疑ハシケ也。疑也者ハ、誠疑ヘバ、以テ為レ可者半バ、以テ為レ

不可ト者半バナリ。今一國尽ク以テ為レ可ト、是王亡ウシナフ半バ也。劫主者ハ、固亡フ其半ノ者也。』

(『韓非子』による。)

注 張儀……戦国時代の遊説家。このとき魏の国にいた。

秦・韓……いずれも戦国時代の国の名。

魏……戦国時代の国の名。

齊・荆……いずれも戦国時代の国の名。荆は楚ともいう。

恵施……戦国時代の遊説家。彼もこのとき魏の国にいた。

以齊・荆偃兵……魏が齊・荆の二国を味方につけることで、秦・韓が攻めてこないようにし、それによって戦争を回避する。

王……魏の国の王。

不可不察也……よくよく考えてみなければならない。

謀者、疑也……人と相談するのは、何が正しいかが疑わしいからである。

劫主……臣下におびやかされる君主。

問一 傍線部①～④の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問二 傍線部Aを口語訳しなさい。

問三 傍線部Bについて、「王」がどのように判断した理由は何か。簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部Cを書き下し文に改めなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問五 傍線部Dは何を言おうとしているのか。本文の趣旨を踏まえて、わかりやすく説明しなさい。